日本IT書紀

045 黒澤村

03 未剖篇
巻之五 靉靆

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第四十五

黒澤村

一

黒澤貞次郎という人物は高峰譲吉とも親交があった。

高峰は消化酵素「タカジアスターゼ」、〝興奮ホルモン〟とも呼ばれる副腎髄質ホルモン「アドレナリン」などの発見で知られる。あるいはニューヨークの公園に、日本から持ち込んだ桜の木を植え、春になるとサクラ・マツリを催した。

知り合ったのは一九〇一年（明治三十四）、日本に帰国する船の中である。

出会ったとき高峰は四十七歳、黒澤は二十六歳だった。高峰は生化学者として国際的な名声を獲得しており、アメリカ合衆国ミシガン州アナーバーの酒造会社パークデヴィス社の顧問として、アルコール飲料を醸造する際の酵母の技術を指導するかたわら、現地に「高峰研究所」を開設していた。

一方の黒澤は、世の中に誇り得る実績などまったくない。志だけを矜持とする一介の青年に過ぎなかった。

おそらく黒澤は高峰に、日本でタイプライターを販売することの意義――より多くの庶民がたやすく小学教育を享受できるよう、漢字を廃すべきである、という自論も含めて――を熱弁した。こうして何回か言葉を交わすうち、高峰はこの青年の生意気さが気に入ったらしい。

そこで高峰は、

「タイプライターもいいが、私が発明した胃薬も売らないかね」

と黒澤に持ちかけた。

「日本人は胃腸が弱くて、何かというと腹をこわしている。それでは欧米に勝てない」

植物と魚介類に慣らされた日本人の胃腸は、牛豚の蛋白質と脂肪を消化し切れなかった。タカジアスターゼが日本人の体力を欧米人並に強くするであろう。

その気があれば、塩原又策を紹介しよう、というのである。

高峰は二年前、塩原と共同でタカジアスターゼの販売を行う合資会社「三共商店」を大阪に設立していた。東京に販売店を持ちたいと塩原は希望していたのである。

黒澤は理解が早く、思考が柔軟だった。銀座に開いたばかりの黒澤貞次郎商会の店頭には、タイプライターとタカ

ジアスターゼが並んでいたと伝えられる。

事務能率増進運動で、黒澤の事業は順調に拡大した。そのため、弥左衛門町の店が手狭まになった。そこで黒澤は一九〇七年、東京市京橋区尾張町二丁目二百十三番地に土地を求めて本社を移すとともに、二年後に鉄筋コンクリート造・三階建ての本社ビルを建設した。このビルは関東大震災の火災にあったものの焼け残り、不思議なことに第二次大戦末期の空襲でも生き残った。

銀座六丁目に本社の用地を購入する際、地主は黒澤を信用しなかった。

「ならば、対価は現金で支払おう」

といっても首をたてにふらなかった。

このことを聞いた高峰譲吉は、千葉県野田の豪商・茂木佐平治（文吉）に話を持ちかけ、茂木が黒澤の保証人となった（「茂木」は「もてぎ」と読む）。

だけでなく、茂木の縁者である北川家が黒澤に資金を提供もした。タカジアスターゼの原料が醤油の醪（もろみ）であったことから、高峰は茂木と懇意な関係にあった。

茂木左平治といえば、「茂木八家」と称される北総きっての豪商であって、これから十年ののち、「野田醤油」を興す人物である。

さらにいうと、これが縁で黒澤は茂木左平治とも親交を結び、その娘・まつの嫁ぎ先である小森家、その縁者で佐原の名家・北川家とも縁を持つようになる。

第二次大戦後、連合軍総司令部（ＧＨＱ）配下のパンチカード・システム部隊および、アメリカ在日空軍立川基地の電算処理業務を通じて多くの人材を養成した北川宗助は、小森まつの実子、すなわち茂木左平治の外孫である。北川家の養子となり、長じて茂木、高峰、黒澤の関係で黒澤貞次郎商店に入った。

それにしても、アメリカから日本に帰る船の中でたまたま一緒だったというだけで、高峰や茂木がのちのちこれほどの親交を持ったのは、黒澤という人物の魅力であったのかもしれない。

ともあれ、明治の人間の関係は濃厚だった。

二

黒澤は一九〇九年（明治四十二）、東京・銀座の松屋デパート前に鉄筋コンクリート造・三階建ての、当時としては斬新なオフィスビルを自ら設計・施工して完成させている。「黒澤貞次郎商店」の名を「黒澤商店」に改めたのは、このときだった。

現在に残る黒澤商店本社ビルの写真を見ると、二階と三

階の間に「業務用器械」「黒澤商店」「ＫＵＲＯＳＡＷＡ ＢＵＳＩＮＥＳＳ ＥＱＵＩＰＭＥＮＴ」の文字が横書きで穿たれている。その規模は、個人商店のものとは思えないほど立派な外観である。

そのかたわら蒲田新宿町に、やはり鉄筋コンクリートの自社工場二棟を建設し、ここで事務機器・用品を生産した。「鉄筋コンクリート」というだけで、珍しがられた時代だった。蒲田工場で生産したのは、おおがかりな機械装置ではなかった。

ゼム・クリップや複写用のカーボン紙、書類ファイル、ルーズリーフといった事務用品が中心であって、一部に機械生産を取り入れてはいたものの、家内制手工業の域を出ていなかった。

そうした事務用の小物や用品は、アメリカやヨーロッパから物品を輸入した際、同梱されていた説明書や伝票に付いていたものだった。初めてそれを見たとき、黒澤商店の従業員は使い方が分からず、出荷元に問いただしたこともあった。事務機械の貿易に携わったことが、図らずも欧米における先進の事務用品を知ることにつながった。

ところが、関東大震災が黒澤に窮地をもたらした。

震災で黒澤は東京・蒲田の工場を失い、本社も火災にあった。幸いだったのは、鉄筋のビルだったことである。すべての資産を灰にしたが、ビルが残った。このとき黒澤商店でタイプライターの販売を担当していた八城勘二（のち「日本事務器商会」に移籍）は、

われわれは、震災で不明になった顧客の所在をつきとめるのに大変な苦労をしていたものだ。ところが、震災で受けた黒澤社長のショックは大きすぎた。われわれは、いるにもいづらい状況だった。

と語っている。

また支配人だった田中啓次郎（のち「日本事務器商会」を創業）は、

冷静に復興の目処を立てるにしては被害が大きく、打撃があまりにも大きすぎた。こうなると従業員をかかえているのは、店主として大きい負担であったに違いない。とりわけ高給者ほど負担が大きい。店主がそうした負担を感じていることは、直接間接にわれわれの耳に達するのだった。

と回想している。

以上のことは『日本事務器株式会社七十五年史』に見えている。

三

震災からほどなく、日本銀行を窓口に一億円規模の「震災手形割引損失補償」が実施され、また周囲の励ましもあって、黒澤は再起を決意した。従業員総出で銀座の本社ビルを清掃し、内装を改め、並行して蒲田に自ら設計施工による新工場を再建した。新工場は一九二六年に完成したが、ただモノを生産する場所にとどまらなかった。

敷地の内には、食堂、浴室、購買部を含む従業員向けの福利厚生建物、車庫、変電所、ポンプ室、材料倉庫、幼稚園、小学校、社宅、池、児童プール、貯水池、給水塔、水道設備などが装備され、自衛の消防団まで編成されていた。

従業員の生活にかかわる一切を企業が用意するというのは、当時はよほど珍しかったと見えて「黒澤村」という呼称がついた。

森村開作、市左衛門父子と同様、黒澤もクリスチャンであって、従業員の福利厚生を充実すること、社会に利益を還元することが、成功した事業家のつとめ、という認識を持っていた。

のちに大工場が同じことをやったのは従業員を確保することと、生活の隅々にまで軍隊的組織を浸透させて運命共同体的意識を持たせるのがねらいだったから、質的には大いに異なる。

事業の再建では、まず冷徹果敢に支配人田中以下の高給者の退職を促して――田中や八城の述懐では、店のことを思って退職したことになっているが、黒澤の立場では全く別の表現になる――負担を軽減し、他方ではアメリカ式のカタログ販売で受注を増やしていった。

店が取り扱っている商品のすべてを「タイプライターと関連器具」「近代事務用機械」「文書の記録と整理」に分類し、三種のカタログに記載して取引先に配布した。

これだと取引先は、何かの必要が生じたとき、カタログから商品と値段を確認して注文を出すことができた。こんにち、事務器や文具、家電製品の販売でカタログが重きを占めているのは、黒澤商店の成功がきっかけを作った。

第一次世界大戦後の不況と昭和恐慌の打撃を受けたのは黒澤商店だけではなかった。森村組も同様に、重大な打撃を受けていた。このため七代目市左衛門は一九二六年、森村組の業務を日本陶器に統合し、翌年には森村銀行を三菱銀行に売却して事業を再編した。

貿易業や金融業は明治の黎明期を脱し、三井、三菱、住友といった巨大資本がなすべき事業に変わったことを見抜いていた。ＣＴＲ社製統計会計機械装置の営業権を黒澤商

店に譲渡したのはその一環だった。

一九二六年十二月、ＣＴＲ社――正確に言えば、その二年前、ＣＴＲ社は「インターナショナル・ビジネス・マシーンズ」に社名を変更していた――の副社長ブレトマイヤーが来日すると、森村市左衛門は代理店契約の打ち切りを申し出るとともに、黒澤貞次郎を紹介した。

ニューヨークの中山が事前に根回しを済ませてあったと見えて、ブトマイヤーは責任契約高条項について「不問」とし、既存の日本陶器、三菱造船を含む全営業権を黒澤商店に譲渡することで合意が成立した。

三社の合意文書は、東京・日比谷の帝国ホテルで調印された。契約解除文書にブレトマイヤーは次のように記している。

私どもは、貴社が過去において、当社のためになした一切および、個人的に小生に尽された御好意にたいし大いに敬意を表します。

森村商事から黒澤商店への営業権移譲は円滑に行われた。新しい契約は一九二七年一月に発効し、ＩＢＭ社の出資で「日本ワットソン統計会計機械株式会社」が設立される一九三七年六月まで、国内におけるホレリス式パンチカード統計会計機械装置の販売は、黒澤商店が担うことになる。

すでに五十歳の声を聞いていた黒澤貞次郎には、失敗が許されなかった。彼は一九一九年（大正八）にバロース社と契約して金銭登録機や会計機の販売を開始していたし、本人がバロース社の機械を使って従業員の給与を計算していたため、統計会計機械装置の効用に理解があった。同社とバロース社との関係は、一九四一年十二月に日米が開戦するまで続いている。

森村開作からの申し出に応じたのは、「最後の賭け」のつもりもあったであろう。このため、森村商事からＣＴＲ社の統計会計機械装置の営業権を引き継ぐに当たっては、ＣＴＲ社に「一年間に五台」という契約条項を削除させるなど、実業家としてのしたたかさも発揮している。

余談だが、東京・銀座の黒澤商店本社ビルは第二次大戦の空襲でも焼けなかった。終戦後、連合軍総司令部（ＧＨＱ）に接収され、国際赤十字社の本部として使われた。一九五二年（昭和二十七）二月に接収が解除され、改修は十二月に終了した。

黒澤商店として業務を再開した矢先、一九五三年（昭和二十八）一月、自宅に年賀に訪れた人の接客中に倒れた。脳溢血だった。享年七十八。

死後、従六位勲五等瑞宝章が贈られた。

黒澤は一時代前の成金的実業家の発想を、ついに持つことがなかった。独創的な手法で事務用機械の市場を切り開いた立身出世の実業家として歴史にその名が刻まれている。

黒澤の死後も黒澤商店は輸入事務機器の販売で堅調に事業を継続した。だけでなく、蒲田工場の一角に設けた研究所で「ページ式印刷電信機」を製品化した。現在のファクシミリの原型である。

これが母体となって一九五七年（昭和三十二）二月、資本金一億円で「黒沢通信工業株式会社」が設立され、一九七〇年四月には受託計算サービスとソフトウェア開発を行う「株式会社クロサワ・コンピュータ・センター」がスタートした。

ちなみに黒澤が建てた黒澤商店本社ビルは、現在もある。ただし、老朽化したため再建され、一階にオーダー紳士服で有名な「英国屋」が入っている。（筆者注：二〇〇四年時点の情報）

また、東京・蒲田の「黒澤村」敷地は、のちに富士通が買い上げて、ここにソフト技術者の研修とコンピューター・センターを設置した。「蒲田システムラボラトリ」（富士通ソリューションスクエア）の名をあげれば、おおまかな場所が分かるであろう。

～～～～　補　注　～～～～

高峰譲吉　たかみね・じょうきち／１８５４～１９２２。金沢藩医高峰精一の長男に生まれ、工部大学校を出てイギリスのグラスゴー大学に留学した。帰国して農商務省に入り清酒や醤油の醸造技術を研究する中で酵母とジアスターゼを発見した。のちアメリカ国籍を取得し、ニューヨークで没した。

アナーバー　Ann Arbor：アメリカ合衆国ミシガン州南東部に位置する。一八二四年に誕生した開拓の町で、その名は最初に入植した二組の夫婦の妻が「アン」「マリーアン」だったことと、産出したブドウの種類が「アーバー」だったことによっている。パークデヴィス社は最初、ワインを生産していたが、高峰譲吉の研究成果を生かして製薬業に転換した。

塩原又策　しおばら・またさく／１８７７～１９５５。長野県で生まれ横浜で育った。横浜に本社を置いた大谷嘉兵衛の日本製茶会社に勤め、のち大谷と共同出資した横浜絹物会社で取締役支配人をしていたとき高峰譲吉と懇意になった。一九〇二年、大阪に三共合資会社を設立し一三年株式会社に改組して高峰を社長に招聘した。近代製薬業の基礎を作った人物とされる。

千葉県野田　千葉県野田で醤油が作られるようになったの　は、古く戦国後期の永禄年間（一五五八―六九）にさかのぼる。伝承によると「飯田市郎兵衛」の先祖が甲斐武田氏に豆油醤油を納め、「川中島御用溜醤油」と称したという。

　確実な記録では寛文元年（一六六一）に「高梨兵左衛門」という人が醤油作りを始め、翌年に「茂木七左衛門が味噌醸造を始めた」とある。それまで醤油は菱垣廻船や樽回船で関西から江戸に運ばれていたが、野田の醤油の生産量が高まるのにつれてそれに取って代わった。

　高梨兵左衛門と茂木佐平治の両家は明治に入って「野田醤油醸造組合」を結成し、併せて「野田商誘銀行」や「野田人車鉄道」「野田病院」などを設立して地域の振興に努めている。この間、同じ千葉県の銚子でも醤油作りが始まり競争が激化した。そこで野田を本拠としていた高梨系と茂木系の醸造元は一九一七年（大正六）、大合同して「野田醤油株式会社」を設立した。このとき社長に就任したのが茂木七郎右衛門である。また二百以上もあった商標のうち、高梨家の「甲子」（きのえね）と茂木家の「亀甲萬」が統一商標となり、それがこんにち広く知られる「キッコーマン」となっている。

人車鉄道　レールに乗った台車を人が押して動かした。一八八二年、宮城県仙台市の木道車が営業開始したのが最初だった。人車軌道ともいった。ピーク時には全国に十四箇所で客車百五十車両、貨車五百車両を数え、年間四十六万人の旅客と五十万トンの貨物を運んだ。

黒澤商店本社ビル　現在に残る黒澤商店本社ビルの写真を比較すると、森村商事本社ビルの模倣である部分が少なくない。黒澤貞次郎は起業家の先人として森村市太郎・開作父子に心酔していた。

日本IT書紀　045 黒澤村

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。